≪資料≫

自由に考えさせる大講義

～堅く・明確な枠の中で自由な考えを引き出す～

≪Methodological Advancement≫

Providing Lectures with Firm and Clear Frames
to allow Students to think Freely.

鹿嶌 達哉

Tatsuya KASHIMA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』
"*Hiroshima International University Journal of Educational Research*"
ISSN:1884-9482

第 10 号　抜刷
Offprint of Vol.10

広島国際大学 教職教室
Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2018 年 12 月
December, 2018

自由に考えさせる大講義

～堅く・明確な枠の中で自由な考えを引き出す～

広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科　鹿嶌 達哉

はじめに

2015 年度第 3 回 FD 研修会（2016 年 2 月 16 日開催）で「大講義室における授業の工夫」について紹介する機会をいただき、「自由に考え『させる』大講義：堅く・明確な枠の中で自由を引き出す」と題した発表（15 分；以下本発表）を行った。大学の授業は大きな変革点にあり、従来の「講義」型授業から「発表、グループ・ディスカッション、フィールドワーク」や反転学習などいわゆるアクティブ・ラーニング（AL）型授業への移行が求められ、移行も始まりつつある。しかし、AL が「書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」能動的学習である（溝上,2016）ならば、大講義室においても AL は（少なくても部分的には）可能である。溝上（2016）はコメントシートに記入を求める形式は「講義中心型授業」として伝統的授業の一つに分類している。しかし、いくつかの AL 型授業を参観した限りでは、考えるための素材や考え方・表現方法の指導が十分ではなく、「事前に準備された資料の表面的な発表」や「単なる話し合い・意見交換」に終わるケースも珍しくないようである。充実した AL 型授業の発展のためには、「学ぶ・考え・表す」ための土台作り・枠作りがもっとも重要となる。本発表で扱われた従来型の講義における自由に「考えさせる」ための枠作り・工夫を記録しておくことは、AL 型授業の発展のためにも意義があると考える。

1. 私の心理学の授業：特徴と基本姿勢

2015 年度には 100 名を越える授業を 3 つ、55～80 名の授業を 4 つ担当した。2013～15 年度の 3 年間の授業評価（「総合的に受講してよかった」の結果に対する評価）は表 1 の通りである。

FD 研修会のために、私の講義の特徴について 2015 年度後期「発達心理学」で受講者（1 年生）69 名に自由に記述を求めたところ、多い記述は「おもしろい・楽しい・興味があった」（34 名）、「わかりやすい」（22 名）に続き、「考えさせられた」（20 名）、「自分のためになった・自分のことを考えた」（16 名）、「もっと勉強したい」（9 名）、「難しい・内容が濃い」（9 名）であった。そこで、本論文（もとは発表）では大講義において「考えさせる」ということに焦点をあてた。

表１　2013～15 年度の授業評価

年度	期	講義名	学年	受講生	評定値（SD）	平均（満点）
2013	前	発達心理学	1 年	145	4.5（0.7）	4.1（5）
	後	学校教育心理学	2 年	70	5.6（0.7）	5.0（6）
2014	前	発達心理学	1 年	106	5.7（0.6）	5.1（6）
	後	学校教育心理学	2 年	78	5.7（0.7）	5.2（6）
2015	前	発達心理学	1 年	96	5.6（0.7）	5.3（6）
	後	発達心理学	2 年	69	5.8（0.5）	5.3（6）

私の授業を 3 つ（2 年前期「発達心理学」、後期「学校教育心理学」、3 年後期「コミュニティ心理学」）受講した学生（約 70 名）が、「3 つの授業を受けた感想」（2016 年 1 月 25 日）を記したものから、「考えさせる・考えさせられた」という内容を含む記述を表 2（傍線は筆者）にまとめた。

（私の考える）心理学の授業では理論や概念を知識として習得しただけでは不十分であり、その知識を自分の体験とつなげることにより納得し、他者の体験の理解へと拡がることが求められる。

2. テーマを絞る

授業をするときにもっとも悩むことは、まずしっかりと自分なりにテーマを絞ることである。「要するにこれがポイント」ということが自分なりにつかめないと準備が始まらない。例えば、「学童期における学校生活の意義」では、「1.家から出る。2.教師の指導を受ける。3.友だちと生活する。4.学ぶ」がいずれも重要であることを大テーマとし、さらに「4.学ぶ」では「α社会生活に必要なことを学ぶ」と「β自分の人生を生きるために学ぶ（自分で考え、判断し、自分らしく生きる）」ことを小テーマとして授業を組み立てた。学ぶ立場からすると、「学童期に何のために学ぶのか」と問われたとき、αとβの 2 つが答えられれば講義の内容を修得したことになる。したがって、試験ではテーマに即した内容が中心に問われる。

3. 説明と理解のための教材作り

「考えさせる」しかも「自由に考えさせる」ためには、それだけの仕掛け、仕組みが必要である。テーマに即した教材として具体的な話、映像、プリント資料などを用意する。

A 具体的な話（一般）：上記の例では、学校で学んでいる読み書きそろばんが、現代の社会生活を営む上で基礎となっていることを説明する。比較のために、狩りや採集を行っている民族では弓矢や木登りが学ばれていること、漁業の島では遠泳や貝採りなどをするなかで潮の流れや海底の地形が学ばれていることを具体的に話す。

表 2　私の授業に対する学生の評価で「考えさせる・考えさせられた」という内容を含む記述

◇考えることが多く難しかったが、「考える」ということ自体をするようになった。
◇先生の意見やエピソードをたくさん話してくれるので、それを受けて自分の考えを見直すことができた。
◇考えさせられることが多かった。こういう考え方もある、あういう考え方もあると気づかされた。
◇講義を受けるたびに自分の考えが心理学の脳になっているように思えた。
◇本当に大事なところは曖昧にして学生に考えさせるので、感想や意見を書くのに頭を悩ませた。
◇授業そのものは一方的だったが、こちらに考えさせる機会が多くて有意義だった。
◇毎回自分について振り返ったり、今の自分を考えさせられたりして、新しいことがたくさん見えた。
◇出されるテーマや教材が深く考えさせられるものばかりで、自分が一般的な視点から見ていなかったことを思い知らされた。
◇求められるレベルが高く内容も難しかったが、とてもやりがいがあった。自分自身の考え方の根幹を持つことの高さが大切さを学べた。
◇どんな質問に対しても回答してくれて、考えさせてくれた。
◇どのような意見にも否定しないで肯定的でいてくれたため、自分の意見を書きやすかった。
◇ワークシートのおかげで何に目を向け、どこをきけばいいのかわかりやすかった。
◇先生が主軸となっていて、落ち着いた空間、かつ良い雰囲気で講義を受けることができた。

B 具体的な話（教員の体験）：教員の体験も語ることがある。社宅の周りをぐるぐる回る電車ごっこが、毎日同じような生活を繰り返しながら微妙に異なる景色を体験する社会人生活と関連していたかもしれないという話をする。教員の体験談はあくまで学生の体験の「呼び水」となるためのものであり、自慢話や単なる思い出話は学生に拒否されやすいので気をつける。

C 映像の利用：映像も用いる。小 1 で微積分の問題を「終えた」少女の映像を見て、この子は本当に微積分がわかったのだろうかと問いかけ、学ぶ意義やわかるとは何かを考えさせる。また、一生懸命育てた牛を食用に出すときに泣く女の子の映像を見て、このようなつらい体験が大切な学びになる理由やプリント学習との違いを尋ねる。学びは将来の準備だけではなく、よく生きる、自分らしく生きるための例として、アメリカで殺人を犯した少年がいかに学ぶ環境を奪われ放置されていたかという映像を見せる。以前と異なり学生は映像というだけでは興味を示さない。テーマとのつながりや見方・視点などを指示しながら「教材」として映像を用いる。

D 教育論等のプリントによる紹介：さらに、心理学者のみならず、いろいろな人のことばをプリントで紹介する。この回では、論語にある「孔子対（答）えて曰わく、『顔回なる者有り、学を好む。

怒りを遷さず、過ちを弐たびせず。』」や「民族を滅ぼすものがただ一つあるとすればそれは教育である」というルワンダ虐殺の生存者のことばを紹介して、学ぶ（βの）意味を考えさせる。

E ホットな教材（学生・教員の関心に近い、身近で最近の話題など）：考える材料はなるべくホットなもの、活きのいいものを選ぶようにする。学生に関心がありそうな話題や身近な社会問題、また、私がそのとき取り組んでいるテーマや考えていること、その場の「思いつき」なども「ホット」な話題となる。例えば、学校の勉強は「試合がなく素振りばかりしているテニス部のようだ」という批判を紹介しながら、練習ではなく本番の授業、子どもがもっとも悩んでいる問題に正面から取り組む授業を紹介して、学校で学んだことと学ぶべきことは何かを学生に考えさせる。その中には答えがないため、問いを提示し、学生と一緒に考えていくしかないようなものも含まれる。

F 多様な学生に対応する内容：近年の大学教育における困難の一つは基礎学力の低下に加え、幅の広い学生が同じ授業を受けていることにある。学力の上下だけではなく、授業への意欲、心の健康度（社会への適応度）、希望する教員との関係にいたるまで多様性が大きい。私の授業では基礎的でわかりやすい内容を中心にしながらも、簡単で重複して学修する内容にとどまらず、（わかってもわからなくても）あえて最先端の研究や難解な理論を紹介するようにしている。「よくできる」学生から「簡単すぎる。もっと難しいことを学びたい」という訴えを何度かきいた。そこで学会で聞いたばかりの新説（「四足歩行⇒二足歩行」ではなく「四足歩行⇒樹木での四手⇒二足歩行」という進化説）、や難解な理論（例えば精神分析の対象関係論における投影同一視という考え方）なども紹介することにより、「よくできる」学生のニーズに応えるとともに、学問の広さと奥行きを実感してほしいと願っている。

4. さまざまな問いかけと表現する機会の提供・確保

以上のような材料を出しながら、「みなさんにもありましたか」「どう思いますか」などと問いかける。そして、ワークシートへの記入、アンケートやクイズへの挙手により「受講者参加型授業」を目指す。

考えてもらうためには表現する場を担保する必要がある。私語を禁じている分だけ表現する場を確保するという意味もある。ワークシートや感想用紙にしっかり書くように求め、アンケートやクイズには必ず手を挙げるように促す。

学生が表現したものに対しては必ずフィードバックを行う。挙手の場合には数えて結果を板書する。アンケートやクイズについても集計結果や正答率などを返す。ワークシートの意見や感想のいくつかをピックアップして次回のプリントに載せる（例は表 3）。すると学生は教員が感想を大切に読んでいること、何を書いてもいいことがわかり、プリントに感想が載ることを楽しみにするようになる。特に大切なことは正しい答えや教員の考えに近づけることではなく、もっと考えるための材料を用意することであり、「こういう点でおもしろい」「こんな風にも考えられる」と興味や関心を深め、視野を拡げることである。

5. 環境作り

自由に考えるためには安全で安心できる環境を用意する必要がある。私の授業では私語は細かく注意する。まじめで静かな学生から私語があると集中できないという苦情をよく耳にする。私の授業はもっとも静かな授業の一つだと言われ、授業の「もっともよい点」に「静かで集中できること」をあげる学生も少なくない。携帯やスマフォもしまわせ、見つけたら必ず注意する。また、授業中に発言を求めると学生が緊張するので、個人には当てないようにする。意見を言ってもらう場合には教室の半分以上の学生にマイクを廻す。回答は否定せず、パスしてもいいし、言いたくないことは言わなくていいとしっかりと伝え、「安心」を確保する。

6. 授業を越えた拡がり

このような授業をしていると「家に帰ってから一人で考えた」、「いつも家族で話している」などの感想が見られるようになる。また、本を読んだとかテレビの見方が変わったという知識の増加ではなく、考え方や見方の変化もうかがわれる。

7. 学生の変化を基準とした授業作り

「何を教えたか」「どんな教え方の工夫をしたか」ではなく、学生が何を学んだ、どのように変化したかを大切にしていく授業を目指し、学ぶ当事者である学生の感想や評価を一つの基準としている。教員が学生に教えるという関係だけではなく、難しいが興味深い人間の心理や行動について、教員も学生とともに学んでいくというスタンスで授業が進むことを目指している。

付録資料として、授業の環境構成や進行に関わる「枠作り」について気をつけていることをまとめた。

表 3　授業の最初にフィードバックされる学生の感想・ワークシートの記述例

【学び】
22.小中高ではやりたくない授業が多かった。今はすべてやって楽しい授業に感じる。
23.もっと学びをよくするためには、「学び」自体に興味を持つようにならなければならない。
24.学校はやらせるところではなく、子どもがやることを手伝う場所でなければならない。
25.大量のプリントをやりながら「何でこんな目にあわなければならないのだ」と思っていた。
26.サッカー部ではみんなで話し合い、試合形式の練習をしていた。わりかし強かった。

引用文献

溝上慎一. (2016). *高等学校におけるアクティブラーニング：理論編.* 東京：東信堂.

【付録資料】しっかりした枠作り

ア）**入室から開始まで**：必ず定刻に開始する。そのためには 10 分前に入室し、資料の配布、前回のワークシートのフィードバック（「1～20」のように学生番号を記した札を用意する）、機材の準備などをする。授業は 80 分で終了し、10 分はワークシートや感想を記入する時間とする。

イ）**教室環境**：温度（「寒いからコートを着たままでいいです。」「暑いから何かであおいでもいいですよ」など）や照明（「来週までに替えてもらいます。」「ここはチカチカするから移動してもいいよ。」）、採光（「カーテンは開けたままでまぶしくない？」）などに配慮し、快適な環境を用意する。黒板はきれいに消し、チョークと黒板消しをバランスよく配置する。

ウ）**座席**：教室と受講生に応じて、3 人席に 2 人が座る程度の余裕があり、前の列が空きすぎないように計算し、「（例えば）後ろ 5 列にはすわらない」と板書しておく。

エ）**配布資料**：プリントは時間前に配布を終え、余ったものは遅刻者用に後ろにまとめて置き、後ろに座っている学生に「遅れてきた人に教えてあげてね」と指示しておく。配布した枚数がわかるように「大 1 中 1 小白 1」、配布資料の場所がわかるように「プリントは後ろ（B15 席）」と板書しておく。

オ）**授業開始時間**：定刻に「はい、時間になったから始めます。」と言い、ざわついているときは「一度静かにしてから始めましょう。」と静かになるのを待つ（1 分以内）。話している人がいたら個々に注意する。（「静かにして」ではなく話している人のところに行き、注意する。）

カ）**配布資料の確認**：配布資料の枚数と種類を確認する。

キ）**前回の感想の紹介**：静かになり、受講の態勢が整ったら（1 分以内）、導入はなく、いきなり前回の感想（プリントしたもの）を紹介する。よい導入は授業に集中させる、興味を持たせる、授業のテーマにスムーズに入るなどの効果が期待されるが、世間話や「雑談」は（特に準備状態にある）学生の受講意欲と集中力を削ぐと思われる。また、感想の紹介は学生のもっとも関心のあるものである。

ク）**今回のテーマの提示**：感想の紹介が終わったら、「前回は～をやりました」と前回の内容を思い出させる。そのまま「今日は～についてやります。」と大きなテーマを紹介する。テーマはプリントか板書で明記する。

ケ）**板書の工夫**：黒板は 4 つに分け、線を引く。左から A ビデオの説明、B プリントに書いてあること、C 要板書、D 雑談の欄とする。B はプリントに印を付けること、C はノートに記入すること、D は記入する必要がないことを第 1 回に説明する。

コ）**指示の明確化・確認**：配布資料には段落番号や記号を多く記入し、説明する際には「資料の 2 ページ、T の（3）にあるように」とどこを説明しているかわかるようにする。教科書のページやプリントの段落番号は、聞き落としている学生がいるため「雑」の欄に板書する。

サ）**雑談の回避**：具体例は多く出すが、雑談はしないようにする。雑談に聞こえる話もテーマとの関連性を明示する。話がそれてもなるべく早く、本線に戻す。学生はカゲで「先生の体験談や自慢話を聞きに来ているわけではない。」と言っている。

シ）**ルールの説明と遵守**：授業のルールを 1 回目（と最初の数回）に説明し、逸脱したら必ず注意と説明を行う。私語を厳禁する理由として、「迷惑をかけるから（だけ）ではなく」、人に話すことにより「考えなくなるから」と理由を述べ、人に話したい内容はワークシートや感想の紙に記入するように指示する。

ス）**遅刻への対応**：遅刻はやむをえない場合もあるから、静かに入室・着席するように指示する。「遅刻は注意しないが、遅れてきて着席するときにしゃべったら注意する」と述べておく。

セ）**途中退室（中座）**：トイレについては初回に「静かに退室して、速やかに静かに戻る限り注意しない。」と（私の授業の）ルールを明示する。入退室が目立ったり、帰室までの時間が長い場合には事情を聞いたり注意したりして、「出入り自由」の雰囲気を作らない（がトイレに不安を持つ学生を緊張させてない配慮もする）。

ソ）**飲食**：飲食については飲み物は認めるが、ガムは禁止する（ルールを明示する）。

タ）**居眠り**：居眠りについては「誰にでも 5～10 分は眠くなることがあるからウトウトはやむを得ない。（また、アルバイトや心の病気等の関係で寝不足に陥り、授業中にしか眠れない学生もいる。）初めから寝ているのはダメ。ずっと寝ているのも欠席扱い。」と説明する。大切な話（全員に真剣にかんがえてもらいたいテーマ）のときには周りに起こすように促すか、私が起こしに行く。（ルールと対応の基本は「私にも守れる」ことであり、私も居眠りが皆無とは言えない。しかし、私語はゼロで過ごせる。）

チ）**欠席等**：体調が悪い場合（特にインフルエンザ）には無理せずに自分で判断して休むことを指導する。その旨を次回報告すれば病欠（非公式）扱いにする。咳き込む人や体調の悪い人には出席よりも体調（と人にうつさないこと）を重視するように話しかける。

ツ）**まとめ**：最後に「今日は～についてやりました。ポイントは○△◇の 3 つです」とまとめる。

テ）**終了時刻**：必ず定刻（10 分前）に終わる。そのために終了の 20 分前程度にどこまでで終わるか、何を話すかを調節する。遅れた場合は「30 秒すぎてしまいましたが」とわびる。延長したり、終了直前に早口で説明したりしても学生は集中して聞かず、理解もできない。

ト）**退室まで**：感想を書いた学生から提出して退室する。「次の授業があるので○○分までに全員出してください。」と時間を区切る。書けない場合は「研究室に持ってきて」と告げる（実際にはほとんどいない）。

ナ）**試験の準備**：試験の場合は、出題範囲、テストの種類、持込物、何を勉強すればよいのかなどをしっかり確認する。欠席が 5 回以上の学生には受験ができないことを事前に通知する。2～4 回の場合には「人より試験を頑張るように」告げる。

ニ）**レポートの課題**：レポートの場合も形式、記述のポイントをしっかり明示する（「自由に」はなし。）遅れる場合の注意点もしっかり伝える。